疎　外　と　は

豊　　田　　剛

なぜ今更「疎外」などという一見苔むした感の否めない問題をここで取りあげるのかについて一言説明しておきたい。私事にわたって恐縮であるが、筆者が哲学などという「緑の牧場で枯草を食う」に等しいことに関心をもちだしたのは、もう五十年も前のことである。その頃には「疎外」とか「人間疎外」というのは、けっこうよく使われるポピュラーな用語であったと記憶する。当時は「実存主義」か「マルクス主義」か、どちらかに与すべきかではげしい相互批判的論争がくりひろげられていた。しかもどちらの陣営においても「疎外」は共通する重要問題であったことは変わらない。出発点が「実存主義」というよりも「実存哲学」だったので、その頃はそちらに傾斜していたが、それに満足していたわけではなく、その思想傾向の抽象性を突かれると身につまされないわけにはいかなかった。それと比較すれば、後に詳しくみるように、マルクスの「疎外」概念の分析[1)]は見事であったといわざるをえない。それは人間が本来の人間らしさを喪失し非人間化されてしまうという事態を、「疎外された労働」として具体的に労働者に即して、これ以上ないほど明晰に剔抉していたからである。ただそこでは労働者の人間性喪失、主体性喪失という事態が極めて説得的に論じられていたとはいえ、まだ「機械」という論点はほとんど前面に出ていない[2)]。

しかし我々が一般に「疎外」という場合、「人間」対「機械」という対置で理解される捉え方がまず念頭にうかぶのではあるまいか。人間は自らの労力を軽減するために機械を作る。その機械によって人間がこれまで担っていた労働のかなりの部分が肩代りされる。その分人間は楽になる。機械は人間の果たしていた機能を代替する。人間がこれまで自らの手を使ってやっていたことを代わりにやってくれるのである。こんな楽なことはない。単純に考えれば、いい

ことずくめの万万歳ではないか。

しかしそんなに能天気に喜んでばかりいていいのかという疑問の声がやがて生じるに至る。機械に人間の働きを代替してもらうことは、とりもなおさず機械に依存することに他ならない。その依存がごくわずかな部分にとどまるものなら、さほど問題にするまでもないかもしれない。しかしいくらでも楽を求めるのが人間の性だとすれば、その依存がだんだん増大することを避けることはむつかしい。その挙句、何でもかんでも機械まかせになってしまう事態の出現は容易に予測可能である。しかしこういう事態は何を意味するのか。何もかも機械まかせにすることは、逆に見れば人間は機械なしには何もできない無能な存在になるということである。人間は自分の生活が快適で楽になるようにと願って機械を発明したが、その前提としてそれをうまく使いこなせるということが担保されていたはずである。人間があくまで主人であり、その人間の為に働くのが機械の役目であるはずだからである。しかしよく考えてみよう。機械に全面的に依存していて、それでも人間は依然として主人であるといえるのだろうか。全面的に依存するとは、その依存対象自身が力を持つことになるからである。それはよく知られたヘーゲルの主と奴の弁証法を想起すれば容易に理解できる事柄である。主人は奴隷の上に君臨しており、奴隷など虫けら程度にも考えていない。自分は生殺与奪の権力を持っているということで、奴隷に対して絶対的優位にあることをいささかも疑わない。しかし主人だけしかいないとしたら、主人はそれでも主人たりうるのだろうか。そうではあるまい。奴隷がいてくれなければ何もできないというのなら、それは奴隷に逆に依存しているということになる。主人などと威張っていても、奴隷がいてくれなければどうにもならないとすれば、主人は奴隷に全面的に依存する無力な存在ということにもなるのである。その奴隷を機械と置きかえてみればいい。それが今の問題なのである。人間が機械に全面的に依存すれば、その時人間は主人として機械の上に立つ存在ではなくなるのである。つまり主体性を喪失するのである。人間が機械を自由自在に使いこなしているというのならいい。たいてい成り行き上、そううまくはいかなくなるのである。

もう一つ別の例をあげてみよう。それはデュカス作曲の「魔法使いの弟子」という有名な曲である。これは弟子がいいつけられた仕事をサボり楽をしようとして失敗する話である。弟子は日頃師匠が箒に魔法をかけて水汲みさせているのを知っていて、自分でもそれを真似て呪文で箒を働かせることに成功し有頂天になるが、止め方を知らなかった。働かすすべは知っていても止め方を知らなかったので、箒を二つにたたき割ったりしたが、それは二倍になって水を汲みつづけ、家は水びたしになり収拾不能になったところで、師匠が帰ってきて一件落着となる話である。

これは現代の「疎外」を表現するのにこれ以上ないほど打って付けのストーリーではあるまいか。人間は機械を十分制御できるつもりであったのに、結局手に負えなくなって、機械の跳梁跋扈になすすべもなく手を拱くしかない体たらく。これでは人間は機械という名の主人の奴隷になりさがるということではないか。しかもその場を無事に収めてくれるはずの魔法使いがいないときている。困難な場面で突然現われて急場を解決してくれる「デウス・エクス・マキナ」（deus ex machina）など都合のいいものがあるわけでもない。（この語に「機械」という字が入っていること自体何ともいえない皮肉なことである。）それは人間を救ってくれる「神」などはじめから存在していないのと全く同じである。「神」に依存することも立派な「疎外」なのであるが……。

これほど現代の世界や社会の負の面を象徴する現象は少ないのではないか。いくら奴隷制の克服に成功したとして民主主義の社会を持ち上げてみても、その内実が奴隷化された（がその自覚がない）人間がその大半を占める社会なら、何にもならないではないか。制度としての奴隷制を廃棄したと誇る社会が実は奴隷ばかりの社会だなどというのは悪い冗談でしかない。しかし現実はまさしくそうなってしまっているのではないか。

そんな見方はおかしい、極論すぎると異論をとなえる人も多かろう。それならもう一つ別の例をあげてみよう。最近電車に乗っていてどうも気になる光景がある。それは「猫も杓子も」といいたくなるほど一車両の乗客の大半がスマホらしきものをいじっていることである。何がそれほど面白いのかよくわから

ないが、大部分の人間がそれに夢中になっている様は異様にうつる。歩きながら、あるいは自転車にのりながら、それを操作しているらしい者もいて、危ないなと思うと同時に、それが寸暇を惜しむほど大事なことなのかと思ってしまう。そんな現象は一過性のもので、すぐ飽きがきてすたれるという見方もあるだろうが、どうもそうとは思えないのである。そういう情景は全体主義の国家を連想させて恐しいが、それに疑問を持つ人がほとんどいないらしいことはもっと恐しい。大げさすぎると叱られることを承知でいえば、何か阿片窟にでもいるような錯覚にとらわれるのである。筆者のような古い人間には、それが自分の主体性を放棄し売り渡す行為にしかみえないのである。それに何の疑問も問題も感じないのは本物の「病気」ではないかとつい考えてしまうのだ。こんな見方はニーチェ的にいえば「時代に合わない（unzeitgemäß）」考察ということになり、「お前の方こそ病気だ !!」という反応が返ってきそうで、苦笑するしかないのであるが。

もう一つの最後の駄目押し的な例をあげてみるならば、パソコンを含めたコンピュータの問題がある。コンピュータは機械である。この機械なしには何一つできないほど今の世の中はこれに頼り切っている。コンピュータは人間が使うものだから、いくら大量に使用されても、それで人間が支配されていることにはならない、というのが一般的な受けとりかたかもしれない。しかし果たしてそうなのだろうか。いろいろな決定が、極めて重要なものも含めてコンピュータに基づいてなされているという事実は否定できない。それは機械ではなく人間が決定しているのだと強弁してみても、その決定の根拠にコンピュータがあるということなら同じことなのだ。株の売買、先物取引、投資信託、銀行業務その他何にせよ、コンピュータが介在することのない領域があるのかどうか考えてみればいい。ほとんど全くといっていいくらいないはずだ。コンピュータがあらゆる領域を席巻しているという事実は驚くしかないほどである。たしかに人間の頭で考えるより、機械の方が早く正確であろう。複雑な計算になると人間はこの機械にとうてい太刀打ちできない。だからこそ人間はこの機械を「信用」する。機械は決して間違わないと信じるのである。これ

は一種の「信仰」といってよいものであり、それは科学「信仰」と通底している。機械といっても所詮人間の作ったものであり、別に万能であるわけでもなく、故障もすれば間違うこともある。駅の改札で機械が誤作動することなど何も珍しいことではない。従ってあまり機械を「信用」しすぎるのも考えものである。機械は絶対正しいと思い込みすぎると、実際は逆なのに、間違っているのは人間の方だとされたりする。こういうことはえてして起こるものなのである。機械は不完全な人間の製造するものなのだから、人間のように心を持つわけではなく、一定の機能を発揮するように作られたままに黙々と働くだけなのである。だから決して機械に「全能」を期待してはならないのに、人間は得てしてその誘惑に抗しきれなくなる。そう、機械が「神」になってしまうのである。くり返すまでもなく機械が全知全能でないことは、それが壊れたり故障したりすることから明らかである。それでも機械が「信用」されるのは不備の確率が低いからであろう。しかしだからといって人間生活のすべてをそれに委ねてしまっていいのだろうか。それが極めて危ういものであることは自明ではないか。

人間は自らの生活をより良いものにしようとして機械を作る。そしてこれまで自ら果たしていた機能を機械に代替してもらう。それが問題にならない程度に収っていればそう目くじらを立てることもない。しかしそれが際限なくエスカレートしてしまうものであることは、現実が如実に物語っているではないか。人間が機械に全面的に依存することは、機械がなければ何もできないということである。人間が主人で機械が召使いであるという関係は、既にその時点で破綻している。機械が主人となり人間がその奴隷となるという逆転現象が生じるのである。これこそ典型的に「疎外」と称される現象に他ならない。その結果生じることは人間のあり方が損なわれるということである。人間が本来あるべき「人間らしさ」を喪失し、非人間化されてしまうのである。それは生き生きとした「人間性」の喪失と表現される事態である。人間が自らの生活を充実させようとして作った機械によって、充実どころか却って人間が奴隷状態におかれることになるとは、何とも皮肉千万な話ではないか。

しかしこれが紛れもない現実であるとすれば、何故そういうことが起こるのかを考えてみなければならない。それがどういう仕組みで生じる事態なのかを解明する必要がある。そうでなければ「疎外」克服の手立てすら見出せないだろうからである。

「疎外」はもとから日本語にあった言葉ではなく、外来輸入語の翻訳である。日常ソガイという言葉を耳にしても、妨げる邪魔するという意味の「阻害」を連想することの方が多いかもしれない。ただ人間にとって望ましくないネガティブな事態を広く指す言葉として定着しつつある感もする。「疎外」は、不和、疎遠、断念といった語義からうかがえるように、人間が本来あるべき状態から切り離された惨めな状態にあることを意味している。この言葉は、人間が虐げられ傷つけられている状態を指して一般的に使用されるようになってきたとはいえ、元々は学術用語である。原語は、alienation（英）、aliénation（仏）、Entfremdung（独）である。alienation は相当古い時代から使われていた言葉で、もとは日常用語であったらしい。alien（エイリアン）という形容詞は、土地、社会、種族、人などに関して、「他の国の」、「外国の」、「異国の」という意味あいで使用される。現代ならエイリアンといえば SF の世界で地球人に対して他の星から来た宇宙人、異星人、異星生物という名詞での使い方の方がよく知られているだろう。それの元にあるのは「他人のものにする」という意味のラテン語 alienatio [3] であるとされる。しかし日常語であったこの言葉が、哲学や社会思想等の領域で重要な意味を担う概念となるには、やはり近世を待たねばならない。ルソーが社会契約論の文脈で各人の諸権利の「全面譲渡」として aliénation の語を使用していることはよく知られているが、概念自体に決定的に重要な意味を持たせて使用したのはヘーゲルであるといわねばならない。そしてヘーゲル、ヘーゲル左派、フォイエルバッハ、マルクスという流れの中に「疎外」という概念の最も重要な展開がみられることも指摘しておかねばならない。とりわけマルクスは特筆に値するので、これをはずして議論するわけにはいかない。ところがマルクスの議論がどれほど「疎外」の本質をつ

く核心的なものであるにせよ、それでこの概念が尽くされている訳ではない。「疎外」という概念の射呈は驚くほど広汎だからである。マルクス以後の所謂マルクス主義をめぐる諸問題に関しても、「疎外」は論争の主要主題であったが、その反対陣営の実存主義の側からのアプローチも看過しえない意味を持つといわざるをえないのである。また更に大衆社会論、心理学、精神分析といった方面からの言及も無視できないものがある。こう見てくるだけでも、どの一部分を取りあげるにせよ一つの論稿を必要とするものであることがわかるであろう。ヘーゲルやマルクスに特化して論じるだけでも、かなりの紙幅を必要とすることは疑いをいれない。こうなるとここで全体を網羅的に論じることはとうてい無理なので、限定された論究にとどまらざるをえないことをあらかじめ断っておかねばならない。

この小論では、「疎外」という考え方が人間の思考の基本にある原理ないし論理によって生みだされるのではないかとする論点から、典型的な「疎外」現象の一つとみられる「宗教」の問題とからめて考察を進めることにしよう。

「疎外」という概念の展開過程で大きな足跡を残した哲学者たちの諸説をふりかえっておくことにする。それがこの概念の解明に資するところ大であると思われるからである。

辞書による意味確認からはじめよう。たとえば「疎外」は「自己に帰属するはずのものが自己から離反し、他者的なものとして自己に対して疎遠な関係をとること。」（現代倫理学事典（弘文堂））と説明されている。「自己疎外」をみると「ヘーゲルの用語。ある存在が、自己のうちにあるもの、自己の本質であるものを外化し（entäussern）、自己が外化したものを、自己自身の他者として、自己にとってよそよそしい（fremd）もの、自己に対立するもの、自己と離背するものとしてみなすこと、をいう。」（哲学事典（平凡社））とある。いずれも自分のうちにあったものが自分の外に出て自分に敵対するようになるという事態を指している。これは人間の心性にはなじみやすい発想なのか、昔話や神話などに山ほど例がある。

この概念を最初に一番深く掘り下げて考えたのは、いうまでもなくヘーゲルであるが、ヘーゲルが何に一番強く影響されたかについても諸説あるようである。ヘーゲルは「疎外概念を悲観論的プロテスタント神学から吸収した」という見方[4)]もあるようだが、決して考えられないことではない。この場合人間と人間との関係ではなく、人間と神との関係、つまり人間の神からの離反が問題になる。人間をなんとか神の方につなぎとめようとする立場からは、「疎外」などあってはならないことで、どうしてそんなことが起こるのかを説明し、その防止策を講じるのが急務となるからである。もっともその場合でも、神への背反としての堕落がたまたま生じる偶発事かそれとも不可避の必然と考えるかで話がちがってくる。神学は「原罪」という形でその堕落を普遍化するのが一般のようではある。しかしそれはそれで神という絶対的な存在がありながら、なぜそのような事態が出来したのか説明せねばならない。そこで元々は汚れのない無垢の状態から堕落が起こるが、神の信仰にもどることで元の無垢に戻る（天国に入る）ことができると約束する、おなじみの陳腐な図式が成立する。神の存在はもとより、こんな単純な愚かな作り話に、人間は昔から騙されつづけてきたのだから世話はない。

それはともかくヘーゲルがいろいろな方面から「疎外」という基本概念を展開するためのヒントを得ていることはたしかである。それにはホッブズ、ロック、ルソーなど近代の自然法思想も含まれるし、フィヒテもはずせない。シラーの影響を指摘する論者もいる。カントの後継者をもって任じようとしたフィヒテがカントの残した課題の解決、つまり現象的世界と物自体の世界（道徳界）の二元論の止揚を目指すのは当然である。フィヒテは主体としての精神によって客体としての現象的世界が生みだされるが、その客体としての現象的世界が今や主体としての精神に対立するものとなり、それは精神にとって外的な事実となるとし、それを精神に対する外化（Entäußerung）のプロセスとして説明した。これはヘーゲルに大きな示唆を与えたにちがいない。また後にシェリングが「理念の自己外化」の体系としてのヘーゲル哲学を汎神論として批判したことからもわかるように、ヘーゲルの理念はいわば神の世界創造の設

計図の意味を持っている。この理念は真の実在としての「精神」であるが、理念はその内部矛盾の発現によって、反対のものである「自然」となり、本来の自己を喪失して自然のなかを転変する。これが理念の自己疎外である。神は自然を創造すると、次に人間すなわち精神を創造するが、それは精神が精神に帰ることであり、理念が自己に帰ることである。それが「自己内還帰」とよばれる自己疎外の回復なのである。「疎外」ないし「外化」はヘーゲルにおいて、精神が発展する過程で必ず経過すべき段階として重要な意義をになっていることが確認される。

しかしヘーゲルは「精神」をもって絶対的に最初のものと考え、「自然」も精神によって措定されるものとする徹底的な観念論者であることは紛れもない。たしかにマルクスはヘーゲルが、運動し産出する原理としての否定性の弁証法において、人間の自己産出を一つの過程としてとらえ、その対象化を外化及び外化の止揚としてとらえていることを、労働の本質を正しくとらえたものとして高く評価する。しかし「ヘーゲルは労働の肯定的側面だけを見て、その否定的側面を見ようとしなかった」点にその限界をみないわけにはいかなかったのである。

マルクスに移る前にフォイエルバッハの疎外論にも少々言及しておくことは必要であろう。なぜならキリスト教の謎を「疎外」という基本原理であれほど見事に説明した事例は他にはみられないからである。「神が人間をつくったのではなく、人間が神をつくりだすのだ」という疑問の余地ない自明の命題すらほとんど理解されない状況のなかで、「神」とは人間が自らの「類的本質」を疎外することによって作り出したものに他ならないとフォイエルバッハは喝破したのである。人間は自らの持つ最もすぐれた部分を「神」に譲り渡してしまうわけだから、この「宗教」という名の自己疎外から回復するためには、自己の主体性、人間性を取り戻さなければならない。これは実にわかりやすい主張である。従ってフォイエルバッハは自らの本質の外化として「神」を否定の対象とは考えなかった。それは自分でも自分を否定することになるからである。フォイエルバッハの「類」的存在としての人間に対する信頼はゆるぎない。人

間が自ら作り出してしまうものを人間が克服できない筈はないと楽観的に考えている。たしかにヘーゲルのようにすべてを観念的に理念から導出するような抽象的思惟の立場に対して、唯一「現実的なもの」として「感性的存在」を対置するという唯物論の主張は説得力に富んでいる。しかしそうとらえられた「人間」といえどもまだ抽象性を免れないのではあるまいか。自然と感性に重きをおく全体的人間のあり方が「自覚」されねばならないという主張は誠にもっともであるとしても、それが現実の社会の中で具体的に活動する人間を活写しえているかといわれれば、然りとはとうてい言えない。ここにフォイエルバッハの徹底した人間中心主義的思考の持つ限界が、その人間把握の抽象性、没歴史性として浮かびあがるのを否定することは困難である。そこにこのフォイエルバッハの思想から大きな影響を受けつつも、さらに深くより具体的に「疎外」の問題を掘りさげたマルクスの見方を吟味しておく必然性が生じる。

マルクスの「疎外された労働」は有名な『経済学・哲学草稿』で詳細に論じられている。労働の疎外は、マルクスが国民経済学から学んだこととして、「労働者が商品に、しかも最もみじめな商品に転落すること（herabsinken）」（S.510）と表現されている。国民経済学は、なぜそんなことが起こるのかを説明せねばならないのに、それを事実とか出来事としてあらかじめ仮定してしまっているのである。もっとはっきりいえば、それは「労働の本質における疎外を隠蔽している（verbergen）」（S.513）のである。そのやり方は「神学が悪の起源を堕罪（Sündenfall）によって説明するのと同じで、説明すべき事柄を一つの事実として歴史という形で偽っている」（S.511）のである。労働者はなぜ富を多く生産すればするほど自分は益々貧しくなるのか。商品をより多く作れば作るほど自分が安物の商品になり下がってしまうのはなぜなのか。それが正に「疎外」と称される事態で、なぜそうなるのかを説明しないと何の問題解決にもならないのである。労働者が働けば働くほどいよいよ貧しくなるという事実は、宗教で「人間が神に多くのものを帰属させればさせるだけ、それだけ人間が自らのうちに保持するものは少なくなる」（S.512）のと全く同じことなのである。この指摘は重要である。そのからくりはどうなっているの

か、それを説明せねばならない。

疎外は、第１に労働によって生みだされた生産物からの疎外としてあらわれる。それは「事物の疎外」（S.515）と名づけられる。これは労働者が労働を投下して生産したものが自分のものにならない（つまり自分を富ませない）ばかりか、「一つの疎遠な存在（ein fremdes Wesen）として、生産者から独立した力（Macht）として」（S.511）労働者に敵対するということである。一生懸命作りだしたものが自分ではなく他人を富ませ、その収奪によって蓄積された富が更に力を増して労働者を圧迫しますます収奪を強化するという「踏んだり蹴ったり」とでも形容するしかない事態。これは「対象の喪失（Verlust）及び対象への隷属（Knechtschaft）」（S.512）と表現される疎外の姿であり、労働者はますます自分自身を失っていくことになるのである。

しかし疎外は生産の結果（Resultat）においてのみ生じるにとどまらず、「生産の行為（Akt）のうちにおいても、生産する活動そのもののうちにおいても」（S.514）生じる。これが労働における疎外の第２の局面であり、「自己疎外（Selbstentfremdung）」（S.515）と称されるものである。それは労働者にとって働くということ自体が本質的なものでなくなることを意味する。この事態は「労働が労働者にとって外的（äußerlich）であること」（S.514）と表現される。それは労働者が働いているときの自分を肯定できず否定したくなる、働いていることを気持ちよく感じられずむしろ不幸と感じる、自分の肉体的精神的エネルギーを充実したかたちで発揮できず、肉体はただ消耗させられるばかりで、精神状態も台なしにされるといった事態である。そんな状態で働いてもちっとも楽しくないのは明らかである。そうなると労働に充実感が伴うはずもなく、働いていない時、働かなくてもいい時にはじめて心が安らぐといったことになる。すると労働が自分から進んでやるものでなくなるのは当然で、無理遣りやらされるもの、したくはないがしないわけにはいかない「強制労働（Zwangarbeit）」（S.514）にならざるをえない。そうなると労働は「欲求を満足させること」にはならず、労働以外の場面で、欲求を満足させるための手段であるにすぎなくなる。それは「自己犠牲（Selbstaufopferung）の労

働、難行苦行（Kasteiung）の労働」（S.514）というようなものになってしまう。それは労働者にとって労働が本質的なものではないということであり、労働が自分自身のものではなく他人のものであることを意味する。それは労働することが結局他人に従属することになるということである。労働者の活動は自らの自己活動ではなく、他人のものであり、それは労働者が「自己自身を失う（Verlust seiner selbst）」ということなのである。そしてこれもまた「宗教」において生じる疎外と同じ構造のものとされているのが注目される。つまり「宗教」においては「人間の想像力、脳、心といった自己活動が個人から独立して、即ち疎遠な神の或いは悪魔の活動として個人に働きかける」（S.514）からである。いくら熱心に働いてもそれが自分のためにならず、他人を利することにしかならないとすれば、労働することに何の意義を見出せようか。労働者が「自分を失う」とは、まともな人間として生活が出来ないということである。それは人間がただの動物になるということである。「食う」、「飲む」、「産む」等の活動はたしかに大事だが、それらが他の活動から切り離され、「唯一の究極目的（Endzweck）」（S.515）になってしまうようでは、それは「動物的」でしかなく、もはや人間の生活とはいえないものであろう。

上記第１及び第２の規定から、疎外された労働の第３の規定が生じる。それは人間を「類的存在（Gattungswesen）」（S.515f.f.）として特徴づけ、「活動的な類的生活（werktätiges Gattungsleben）」（S.517）を営むものと規定するところから出てくる。（ここにはフォイエルバッハの影響が見て取れる。）人間も動物と同じく生命活動を営むが、「人間は自分の生命活動そのものを自分の意欲（Wollen）や自分の意識（Bewußtsein）の対象にする」（S.516）という点で動物から区別される。人間は意識的な生活を営むがゆえに「類的存在」といわれるのである。疎外された労働は人間から、その「類的生活を奪い取り……動物に対する人間の長所を短所に変えてしまう」（S.517）。それが疎外された労働は「人間から類を疎外する」（S.516）といわれる事態なのである。疎外された労働は「自由な活動である自己活動を手段にまで引きさげることによって、人間の類的生活を彼の肉体的生存の手段にする。（S.517）つまりそれは

「人間の類的存在を、すなわち自然をも人間の精神的な類的能力をも、彼にとって疎遠な本質とし、彼の個人的生存（Existenz）の手段としてしまう。それはまた人間から彼自身の身体を、同様に彼の外にある自然を、また彼の精神的本質を、要するに彼の人間的本質を疎外する」（S.517）のである。これは人間がもはや人間らしく生きることができず、ただ動物的に生命を維持するだけの存在になってしまうことである。

この第１の「労働の生産物からの疎外」（S.511）、第２の「生産的活動そのものの内部において現われる疎外」（S.514）、更に第３の「類的存在からの疎外」（S.516）、それらからの直接的帰結の一つとしてあげられるのが、第４の疎外、つまり「人間の人間からの疎外」（S.517）なのである。勿論これらの疎外はすべて連関するものである。しかし一体何故このようなことが起こるのであろうか。それが「神々」（S.518）によるのでもなければ、「自然」によるのでもないことは自明である。それが「人間そのもの」（S.518）によって引き起こされるものであることは疑いをいれない。宗教的自己疎外が「俗人と聖職者の関係」（S.519）のうちに必然的に現われるように、労働の疎外は労働者が関係する「他の人間たち」から生じる。それは自分では生産しないが、生産されたものをわがものとする人間である。労働とは無縁で労働の外部にいる人間、つまり「資本家（Kapitalist）」（S.520）である。資本家による「支配（Herrschaft）」（S.519）によって疎外が生みだされると考える以外にない。疎外された労働は、労働しない者を富ませることによって「私有財産（Privateigentum）」（S.520）を生みだす。この疎外された労働の産物、成果である「私有財産」が再び疎外された労働の拡大再生産の元になるというなんとも皮肉な悪循環。こういった「隷属状態からの社会の解放」は「労働者の解放（Emanzipation）という政治的形式において表明される」（S.521）というのがマルクスの処方箋である。

「疎外」という問題の本質を考えるための準備として、様々な哲学者たちの説をみてきた。中でもマルクスの鋭い洞察は出色で他の追随を許さない。160年以上も前に書かれたものであり、すべてをそのまま受け入れるわけにはいか

ないが、それを念頭におかずこの問題を論じることはできないと思わせる深みをその議論はそなえている[5)]。以上を参考にしながらこの問題を考えていこう。

「疎外」という問題の起源は、今我々が論じているような形ではなくても、昔からあったといえるのではないか。それは人間が生きる限りどうしても出てくる問題ではあるまいか。人間は何も考えていないように見えても、やはり自分のことを考えるもので、自分の生き方について自分なりの評価をするものである。その場合自分の生き方に完全に満足できていれば問題はないが、たいていは「これでいいのか、もっといいまともな生き方があるのではないか」と考えたりするものであろう。それは既に一種の「哲学」の始まりといってもよい。思考の方向が自分に向うのが「反省」である。外に向うと外界や他人が対象となる。自分の置かれている現状を「不充分」なもの、「不満足」なものとみることは誰にでもある。というよりむしろそれが普通であろう。そうなるとそれをなんとか良くしたくなるのが人間である。それには「なぜこうなっているのか」理由をさぐる必要がある。（しかし思考力が足らないと、いいかげんな考えに丸めこまれてしまう。これがたいていの場合悲しいながら現実である。）

それを考えるにも二方向がある。「悪いのは自分だ。自分が至らないせいだ」と自分のうちに原因を求める考え方と、「悪いのは他人だ、世の中や社会だ」とそれを外に求める考え方である。ただそのいずれにしてもその基礎にあるのは自分のおかれている現状についての自己認識であることは変らない。

古代には奴隷制が強固な基盤に支えられて存在していた。それはプラトンやアリストテレスといった知の巨人たちですら何の疑問もいだかないほど当然のシステムとして機能していた。ローマ時代には、奴隷でも貴族の家庭教師をつとめるとか金をためて解放奴隷になるとか、必ずしも過酷な境遇の者ばかりでもなかったろうが、人間扱いされないひどい仕打ちを受けることも珍しくはなかったであろう。その場合なぜ自分はこんな目にあわねばならないのかと疑問

を持つ者はいたのであろうか。自分は虐げられている、これはおかしい、理不尽だと感じた者はどれくらいいたであろうか。スパルタクスのようにこれはおかしいと感じ反乱を起こす者もいただろうが、それはごく少数にとどまる。たいていは自分の投げこまれた人生を運命として甘受せねばならなかったであろう。人間はたいてい無力なものであり、無力な個人が社会のあり方がおかしいから変えようなどと考えるはずもないし、またこれはできない相談だからである。しかし「それはおかしい」という感覚は大切である。たとえ漠としたものであれ、それがなければ何も始まらないという意味で極めて大事なのである。全くそれがないのが本物の奴隷状態というものであろう。現代人の大半がこの状態にあるのではないかと疑う。

しかし「おかしい」という価値評価は、当然そうでない「おかしくない」事態を前提にしているはずである。それは、こうあるべきだ、これが正しいと思っているのに、現実はそうなっていないということだからである。究極の正しさ、「正義」などという大層なものが具体的な形であるわけではない。それは「理念」とでも呼ぶしかない代物であり、現実に存在しているものではない。しかしそれがないと我々は価値判断ができないのである。つまり我々は常に現実にはありえない究極の価値基準としての「理念」に照して判断していることになる。マクシマムでなければ基準としての役目は果せないし、評価するためにはこういう尺度がどうしてもいる。中庸ではそれ以上の高次のものは測れないからである。マクシマムが現実になることは勿論ありえないが、それは目指すべき目標、導きの星としては必要なのである。だからこそ我々はそういう基準を思い浮かべて価値評価を行うことになる。これは現状を少しでも良くしようと思うならなくてはならない作業になる。人間なら誰でもこういうことは行っているものである。しかしこういう作業を行うなら現状に完全に満足などという人はほとんどいるまい。満足は所詮相対的なものだから、程度の差があることはやむをえない。不満は残るもののほぼ満足という人もいれば、差別され虐げられていると不満の極にいる人もいるだろう。しかしいずれにせよ何らかの手立てをとりたいとは思うのではないか。改善はとても見込みがなく不

可能だとあきらめている人が大半でも、それを全く願わない人はいないにちがいない。従って問題はそれに対してどういう態度、手立てをとるかということになる。

この場合先にふれたように、対応は二つに分かれる。「内に」つまり主観の側に向けられるか、それとも「外に」、対象（客観）の側に向けられるかである。厳密にいえばこれはそれほどはっきり区別できるものではない。（議論をわかりやすくするための区分で、事態は当然相互関係的であり、そう単純なものではないことはいうまでもない。）

対象の側に向う問題解決の方向は当然困難を含む。対象は複雑であり、何をどうすればよいのかわかりにくいからである。それに比べれば目を主観の内部に向けることは容易に可能である。自分が悪いのだ、自分のあり方（心がけ）を変えればすべてうまくいくのだと考えればすむからだ。得てして人間はこういう方向に向いがちになるものである。しかし実はここに大きな陥穽がある。勿論、主観の側には何の落度もなく、悪いのはもっぱら客観の側だなどという理屈が成り立つわけはない。主観の側に問題がないことなどありえないからである。問題は原因をすべて主観の側に還元し集約してしまうという態度にある。世にあるさまざまな宗教をみてみるがいい。何とこの傾向が支配的であることか。悪いのは私なんです、すべては私のせいなのです、私が変りさえすればすべてがうまくいくのです式の単純な論理がなんとはびこっているかは、驚くのを通りこしてあきれてしまう程である。しかし悲しいかなこれが現実なのである。ただそれにはそれなりの理由があることを知らねばならない。

ある主張が人々に広く受け入れられるには、それは単純なわかりやすいものでなくてはならない。物事の因果関係は複雑に入りくんでいて、そう簡単に説明できるようなものではない。従って何が原因で何が結果なのかを突きとめることは決して容易ではない。というよりよく考えてみれば、それは確定することなどできないほど錯綜しているものである。もっともそれなら結局何が善くて何が悪いのかわからないことになる。一般の人々はそんな答に満足はしない。答は明確でわかりやすいものでなくてはならない。それが求められるので

ある。原因をすべて主観に帰するような解答が好まれるのは、人々の頭がそれだけ単純にできており、単細胞化されているということなのである。そのことを示す実例をあげるのは造作もないことである。「○○で癌が治った」、「××の効果は信じられないほどだ」といった健康食品やサプリメントの広告を見ればよい。「これ」とか「あれ」とか単一のものが効果の原因とされているはずだ。実際に効果があったとしても、それは「これ」が効いたのかどうかはわからない筈なのに、それが原因だと一方的に決めつけられている。もう一つ例をあげておこう。それは水戸黄門に代表されるようなテレビの時代劇によくみられる単純な勧善懲悪もの、お涙頂戴ものである。人々がそれを好むのは善悪が単純に決まっていてわかりやすいからである。悪いのは家老や代官や私腹をこやす悪徳商人であるというステレオタイプ化された図式がそこにある。世の中そんな単純なものではなく、本当のところ何が善で何が悪かは極めてわかりにくい。何かを単純に悪者、スケープゴートにするということがなければ視聴者は承知しないらしい。それが全く現実とは遊離した絵空事に類することであっても、善悪をはっきりさせれば安心し、それがカタルシスになるという構造が定着してしまっているようである。これは人々が単純な主張でなければ受けつけないという思考能力を欠いた精神構造になっているということでもあるし、それによって益々その構造が固定され強化されることになっていることを示している。新聞、テレビといったマスコミもまた学校の教育制度も、こういう単純な思考能力欠如人間を作ることを目的としているのではないかと勘繰りたくなるほどである。否、それが真相なのであろう。

現代人は「疎外」されているかといえば、間違いなく「疎外」されていると考えざるをえない。「疎外」と一口にいっても、いろいろの相のもとに出現するものであり、機械の奴隷になって自らの人間性を喪失している[6)]という事実一つとりあげても、それは言えるのではないか。しかしたいていの人はそうは考えない。そういう自覚がないのである。それはたしかに困ったことだが、そのための意識操作が抜かりなく行われていることを考慮に入れれば、別にそ

れほど不思議なことでもない。

社会や世界のあり方を考える場合、どうしても支配・被支配の構造ないしは枠組みを基本原理に据えないと正しい把握に至らないことは確かである。「疎外」もあらかたこの構造からの派生現象であることはいうまでもない。優位にある支配側はその支配をより強固にし現状を維持固定するために最大限の努力を払っている。イデオロギー的な対策もその一環で、宗教はその恰好の手段なのである。こういう構造を変え少しでも改善するためには、その構造自体に目を向けること、つまり「外に」目をむけ現実を知ることが必要なのだが、そうさせない操作が目に見えないバリアとして社会のいたるところに張りめぐらされている。すべては個人の心がけの問題であるかのように目を「内に」向けさせる誘導がどこにもあふれている。悪いのは自分だと責任をすべて個人のせいにしてしまうのは、客観から出て来る問題をすべて主観の問題にすりかえるインチキである。宗教はまっ先にそのお先棒をかつぐ存在であるが、知識階級そのものが支配側を擁護するイデオロギー的ケルベロスと化しているのである。知識階級は常に支配側に取り込まれる。「知」は立派な支配のための道具なのである。学歴偏重社会という現実はその証左である。そして被支配側をできるだけ「無知」のうちにとどめておくことが支配側にとっては好都合なので、そのために知識人が動員されている。宗教はその最たるものである。悩みを解決してもらおうと神にすがったところで、もともと存在していない神に何ができようか。信じることでつかのまの安心が得られても、それで現実の社会が何一つ変わるわけではない。というよりも現実は変わらなくていいんだ、このままでいいんだと諦めさせ、現状維持しかないといいきかせるのが宗教の務めなのである。神と人間の仲介者と自称して、ありもしないものをあるといい、それにすがればすべてがうまくいくと説く職業的聖職者ほど見事な詐欺師はまたといない。それを信じる者はその詐欺師たちのカモになりせっせと彼らを養っているのである。こんな者たちが白昼堂々と人に徳を説くのだから偽善もここに極まれりといったところである。従って宗教自体が立派な「疎外」現象なのだから、宗教にすがって「疎外」からの解放を望むほど愚かなことはない。それ

は「疎外」から救われることを願い、もう一つの「疎外」に身をゆだねることだからである。

「疎外」から解放されるためには人間は自らの人間性、主体性をとり戻さねばならない。そのためにはまず「疎外」という事実に「気づく」ことが先決である。それから何故そんなことが起こるのか考えるのだ。それには人間はもう少し「賢こくなる」必要がある。いいかえればもう少し深くものを考える洞察力、思考力を持たねばならない。ずっと昔にカントが「啓蒙論文」で、わざわざ「賢くなるのに遠慮はいりません」といってくれているのに、そしてその一番の障害が「宗教」だと親切に教えてくれているのに、少しもそれが進展しているように思えないのはなぜなのか。嘆かわしい限りだが、そういっていてもはじまらない。

人間が本当に人間らしくあるとはどういうことかを考えれば、人間存在の社会性に思い至る。人間は他の人間と交わりながら生きていくしかないのに、その大事な人間関係が疎外されている（マルクスの第４の「疎外」）のである。人間が人間と本当の交わりを持てなくなり、ばらばらに切り離された孤独な個人として孤立し、真に連帯しえない状況におかれている。互に信頼し合えるような望ましい人間関係よりも、とげとげしい敵対的関係の方が目立つ社会。じゃどうすればいいのかと人は聞くだろう。速効性の特効薬など勿論ないが、ただ一つ確実に言えることがある。それはあまり機械を「信用」しすぎてはいけないということである。人間は自らの能力を機械に代替させることで、その代償に自分自身の能力を退化させる。車に依存しすぎると歩かなくなり歩行能力が減退する。これは身体能力すべてにあてはまる。使われない器官は退化するからである。そのことは当然精神的能力についてもいえるだろう。精神的活動まで機械に頼るようになるとまずいのではないか。たとえばものを書くのに機械（パソコン）に依存するようになると、精神的能力、脳力に悪影響があるのではと心配になる。機械に依存しなくてもすむ部分は依存せず、その部分をできるだけ守らねばならないのではないか。それが生きものとしての人間の自然的能力をこれ以上退化させないための最低限の戒めではあるまいか。

「機械に依存しすぎないようもっと注意しないと、終いに魂を取られるぞ！」というのが単なるジョークとして笑って済ませられればいいのだが……。

註

1）マルクスからの引用は、Dietz 版作品集補巻 I による。

2）マルクスの時代には、今日のように機械技術文明が途方もなく進展する事態はまだ予測されていない。ただ人間が「最もみじめな商品」（S.510）に転落するとか、労働は「労働を機械（Maschienen）によって代えるが、労働者の一部を野蛮な労働に逆もどりさせ、そして他の一部を機械にする」（S.513）といった表現が見られることは注目すべきである。

3）ラテン語 alienatio は、1）譲渡、処分、処分権、2）放棄、断念、3）疎遠になること、嫌悪、離反、背反などの意味を持つ。alienatio mentis という形で精神病を指す使い方があるのは面白い。ゲーテは『ラモーの甥』を独訳する際、aliénation d'esprit（正義の喪失）に Entfremdung des Geistes をあてている。

4）池田勝徳『疎外論へのアプローチ、－系譜と文献－』（ミネルヴァ書房）1 頁参照。この著は疎外論の概観にはうってつけで、多くの有益な教示をうけた。記して感謝する。

5）後期のマルクスでは「疎外」の問題があまり論じられなくなることから、それを初期だけに限られる問題として軽視するような見解もあるが、それが正しい見方であるとは思えない。

6）ネットやメールは便利であり手軽に扱えるので大いに利用されている。利用者はそれらを自由に使いこなして生活を有意義なものたらしめていると得意になっているが、結局それらに翻弄されているということなのではないか。それに加えて言葉のやりとりが安易に行われるため、「言葉の重み」が失われるのではないかという危惧の念も無視できない気がする。